

後撰和歌集注釈(四)

― 卷三春下(81~100) ―

工 藤 重 矩

(昭和六十一年九月十日 受理)

贈太政大臣あひわかれてのち、ある所にてそのこゑを
きゝて、つかはしける

藤原顕忠朝臣母

81 鶯のなくなる声は昔にてわが身ひとつのあらずもある哉

贈太政大臣時平が別れてのち、ある所でその声を聞いて、送つ
たうた

鶯の鳴いているらしいその声は昔のままの声で、我身ひとつだけが
昔とは違ってしまったことです。

贈太政大臣は時平。延喜九年四月四日に薨じて翌日正一位太政大臣を
追贈された。顕忠母は『公卿補任』承平七年の顕忠の尻付には「母大納
言湛女」とあり、底本の勘物も源湛女とする。ところが、『大鏡』時平
伝、『尊卑分脈』顕忠の注では「大納言源昇女」とする。湛と昇とは兄弟
であり、顕忠の母がどちらの娘か判然としないが、資料的には『公卿補
任』を探るべきであろうか。二荒山本は「贈太政大臣」の「贈」がなく
作者も「あさたゝあそんのはゝ」とある。太政大臣は忠平、朝忠母は中
納言山蔭女である。しかし、朝忠の父は定方であるから、山蔭女が忠平

にかかる恨みの歌を送る必然性はなく、二荒山本は「きゝさ」の誤りで
ある。

この歌は、諸注に指摘のある業平の「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我
身ひとつはもとの身にして」を裏返しにした趣きである。下句は深養父
の「昔みし春は昔の春ながら我身ひとつのあらずもあるかな」(新古今
集一四五〇)に同じ。深養父と顕忠母とは同世代であるから、どちらが
前とも決められないが、影響関係はあるであろう。上句、「鶯の鳴くな
る声」は『古今集』春上、よみ人しらず「野辺近く家ゐしせば鶯のな
くなる声は朝な朝なきく」がある。

歌意は『新抄』に「時平公の声を鶯になぞらへて、其こゑは昔すみ給
ひたるをりにかはらねど、今は絶果給ひぬれば、わが身ばかりはもとの
やうにもなき事かなとなり」とあるとおり。

さくらの花のかめにさせりけるがちりけるをみて、中
務につかはしける

つらゆき

82 ひさしかれあだにちるなとさくら花かめにさせれどうつろひにけり

桜の花の瓶にさしていたのが散ってしまったのを見て、中務に送ったうた

いつまでも咲いていよ、はかなく散るなと思って、桜花はかめにさしていたのだけれど、そのかきもなく、散ってしまったのだなあ。

堀河本・二荒山本・片仮名本には次の83の返歌がない。そのことと関連するの、二荒山本には「中務につかはしける」がなく、作者も読人しらずとなっている。この歌、『拾遺集』雑春一〇五四に重出し、詞書は下の『貫之集』にほぼ同じ。中務の返しはない。『貫之集』一八五六には「敦慶の式部卿のむすめ、いせの御の腹にあるが、ちかうすむ所ありけるに、折りてかめにさしたる花をおくるとてよめる」とある。

「かめ」は『倭名抄』に「楊氏漢語抄云瓶子和名加米」とある。その瓶を「亀」に掛けて、千年万年を経る亀にさしたのに、そのききめもなく散ってしまったというユーモア。類似の例は、『標注』に指摘している『続古今集』賀一八六〇「同じ院（上東門院）の後の宮と申しける時、すずりのかめに桜の花をさしおかれて侍りけるが、ひさしく散らざりけるを見てよみ侍りける 伊勢大輔 つきもせずよはひ久しき亀山の桜は風も散らざりけり」がある。この硯のかめは『倭名抄』に「水滴器今案和名須美数理賀米」とあるそれで、『伊呂波字類抄』には「硯瓶俗用之 水亀」ともある。「水亀」の語は『本朝文粹』卷十二の源順「禁制文」に「手ニ水亀ヲ提ゲテ近ク青苔ノ暁ノ露ヲ採ル」とある。亀の形をした水入であり、伊勢大輔の場合も亀の形をしていたのであろう。だとすれば「瓶」「亀」の掛詞であると同時に、もっと直接に視覚的なものである。貫之の場合にも、瓶—硯瓶—水亀という連想が実際的には働いているのかもしれない。「瓶」「亀」の掛詞は、早くは『古今集』雑上八七四敏行の「玉垂のこがめやいつら」の例がある。

亀が千年を経ることは『芸文類聚』亀に引く『史記』『説苑』『抱朴子』等に見えるが、和歌では『古今集』賀三五滋春「鶴亀も千年の後は知らなくに」など。また『後拾遺集』雑五 一一五四「人のかめに酒いれて盃にそへて歌よみて出だしはべるに 藤原為頼朝臣 もちながら千代をめぐらむさかづきの 清き光はさしも見えなむ」は、瓶から亀を連想して、千代もめぐらむと詠じたものである。

返し

83 千世ふべきかめにさせれど桜花とまらむ事は常にやはあらぬ

千年を経ることができなかめにしても、桜花が留まらないことはいつものことではないでしょうか。

堀河本・二荒山本・片仮名本、この歌なし。『貫之集』では「千代ふべきかめなる花はさしながらとまらぬことはつねにやはあらぬ」となっている。『中務集』にはなし。

第四句「とまらむ事」は、中院本・貞応本を始め承保本・雲州本なども「む」とあるが、『新抄』に「此歌、貫之集には（中略）とあり。此所の下ノ句、とまらむとあるはことわり聞えず。こはきはめて、とまらぬの写誤なり。契沖法師も師翁もしかいはれたり。」とあるごとく、否定の「ぬ」であるべきである。ただ、「ぬ」とあるべき所を「む」とすることは時折あるようで、単なる誤写か、意を誤ったことか、ぬ↓むと変ったのか、いずれにせよ転写段階での改変であろうが、判断に迷うところである。さて、下句は「桜の花が留まらないのは常のことです」の意だが、これを『抄』は「とまらむ」で解しているのは、歌意からも非である。

歌意は『新抄』に「千年を経べき名の瓶にさし給へばとて、花は長くはとまらず、散果るが花のさだまりにては侍らずや、といひて、さればこそ其花も散侍つらめといふをふくめたるなり。」とあるのがよい。貫之翁としては、せっかく伊勢の若い娘を相手に、瓶_二亀とし_一られたのに、返歌はかなりそっけない、いわゆるみもふたもない物言である。

貫之は天慶九年(九四六)に卒しており、中務は生年未詳であるが、延喜十年代に生まれたとすれば、天慶初めには十八〜二十八歳ほど。

題しらず

よみ人も

84 ちりぬべき花の限はをしなべていづれともなくおしき春哉

散ってしまうはずの花という花はみな一様に、どの花この花ということもなく、散るのは惜しい春だなあ。

「ちりぬべき」は『新抄』の「花といふ花のかぎり、ことごとくちりぬべき花なれば」に従って、散ってしまうにちがいない花、散る定めの花の意で訳したが、『抄』は「散がたに成花といふ花は」とあり、今にも散りそうな意に解している。どちらにでも解し得るが、「おしなべていづれともなく」と花を限定しておらず、五句では「惜しき春哉」と、春一般のこととして詠んでいるので、『新抄』の方がよい。『拾遺集』春五七清正「散りぬべき花みる時は菅の根の長き春日も短かかりけり」も類想の歌だが、これもどちらにも解し得そうである。

「かぎり」は、しするものは全ての意。「おしなべて」も、全て例外なしにの意。「花の限」「おしなべて」「いづれともなく」はみな類義の句。「いづれともなく」は、何の花と限らずにどの花もの意。春、散るを惜しむというと、桜か梅であることが多いが、それと限らず、全てという

ところがこの歌の作者の興趣の存する所。
『続古今集』春下一六九忠実「ながめこし山の末野の夕霞その色とな
く惜しき春かな」

朝忠朝臣となりに侍けるに、さくらのいたうちりけれ

ば、いひつかはしける 伊勢

85 かきごしにちりくる花を見るよりはねごめに風の吹もこさなん

朝忠朝臣が隣にいましたときに、桜がこちらの庭までひどく散りましたので、言い送りましたうた

垣根ごしに散って来る花を見るよりは、いっそ桜の木を根ごと風が吹き越してほしいものです。

『伊勢集』I三六四、詞書「となりのさくらの花を見てやる」II四九〇「土御門の中納言の家のとなりにむすころ、その家の花の散るをみていひやる」歌「かきごしに見れどもあかずさくら花ねながらかぜの吹もこさなむ」とあり、「返し」として「桜花うゑて我のみ見むとかはとなりありきも人やするとて」とある。『古今六帖』二隣には二三句「みればかひなし桜花」とあり、朝忠の返歌は作者名不記で収める。

「ねごめ」は根ごと。『枕草子』一九一段(野分のまたの目)に「根ごめに吹折られたる」とある。『抄』『新抄』には「源氏物語」早蕨の「袖ふれし梅は変らぬ匂ひもてねごめうつろふ宿やことなる」を指摘する。

「ね」には「寝」を響かせ、恋の戯れを添えている。「香ごめ」(本集五六「花ごめ」(万葉集三九九八)の語もある。

隣家との歌の贈答はしばしば例のあることで(古今集一六七、本集七九・三九四など)、さほど珍しくはない。似た状況での例には『古今集』雑体

一〇二「あす春立たむとしける日、隣の家の方より風の雪を吹きこしけるを見て、その隣へよみてつかはしける 清原深養父 冬ながら春の隣の近ければ中垣よりぞ花は散りける」や、『標注』の指摘する『新古今集』雑上 一四五一「堀河院おはしましけるころ、閑院の左大将の家の桜を折らせにつかはすとて 円融院御歌 かきごしに見るあだ人の家桜花ちるばかり行きて折らばや 御返し 折りに来と思ひやすらむ花桜ありし御幸の春をこひつ」がある。堀河院と閑院とは隣接した建物。このような隣家の花を詠むことは、『古今六帖』第二にも「隣」の項があるが、平安後期になると歌題としても採りあげられるようになる。『金葉集』六八一に内大臣家越後の「隣家藤花」の題の歌があり、『新勅撰集』二二九には「上の男ども隣庭萩といふ心つかうまつりけるに」と詞書のある隆親の歌がある。後期には、隣家の花の題がやや流行した。『平安和歌歌題索引』瞿麦会編を参照されたい。

朝忠は右大臣藤原定方の五男。延喜十年（九一〇）の生れ、康保三年（九六六）卒。土御門の中納言、堤（の中納言）と称された（公卿補任）。さて、本集三九四によれば、伊勢の家の隣に雅正が住んでいたという。雅正は中納言兼輔の男。雅正の男為頼の母は定方女である。即ち、雅正は定方女と結婚していた。父の兼輔もまた定方女と結婚していた。そして兼輔は堤中納言と称された。朝忠もやはり「堤」と称された。この二つの堤の邸が別のものである可能性はもとより存するが、兼輔家と定方家との結び付きの強さを考えると、この「堤」は「堤中納言兼輔」の堤邸と同じものであるとも考えられよう。つまり、堤邸は定方の所有であった、兼輔が堤中納言と称されたのはその堤邸の定方女に住みついた故であり、朝忠は兼輔没後にその家をも伝領したのであろう。三九四で雅正が伊勢の隣に住んだのは、その堤第の定方女の許に通いすんでいたと

いうことではあるまいか。朝忠が兼輔・雅正の女に通ったという記録はないので、上のように考える方が穏やかであろう。堤の家が元来は兼輔の所有ではなかったとすると、兼輔が晩年に病を得たとき、栗田山口の邸に帰りそこで没したということもよく理解できる。この問題は、紫式部の居宅とも関連するので、もっと詳細な考証を要するが、基本は右のようであると考ええる。

女につかはしける

よみ人しらず

86 春の日のながき思ひはわすれじを人の心に秋やたつらん

女に言い送ったうた

春の日のように、長くいつまでも絶えない私の愛情はあなたを忘れることはありませんが、あなたの心にはもう飽が来たのですか。

「春の日の」は「長き」の枕詞的用法。第五句の「秋」と対語。『古今集』恋三六二四宗子「逢はずして今宵あけなば春の日の長くや人をつらしと思はむ」は同じ用法。「長き思ひ」は末長く続く愛情の意であるが、逆に気が変りやすいのは「心短し」という。↓五七九。

「わすれじを」の「じ」は打消の意志。忘れないつもりだがの意。類想の歌に『古今集』恋五七九四躬恒「吉野川よしや人こそつらからめはやく言ひてし言は忘れじ」がある。

「人の心に秋や立つらむ」は「飽」を秋にとりなした。この掛詞は甚だ多く、恋の歌で「秋」とあれば、ほとんどは「飽」との掛詞である。

『古今集』恋五七六三「わが袖にまだき時雨のふりぬるは君が心に秋や来ぬらむ」『貫之集』六〇三「人の身に秋や立つらむ言の葉の薄く濃くなりうつろひにけり」などは類似の言い回し。

歌意、『新抄』に「春の日の如くゆたかに長き心ざしなる我は、いつまでも忘るゝ事はあらじを、そなたの心には、もはや秋がたちて我を厭ひたるにてやあらんとなり」とある。「春の日の長き思ひは忘れじ」とあるから、春の頃に事が始まって、その秋近い頃の詠であろうか。自然の秋が立つのは理だが、人の心にも秋が立ったのかと疑ったのである。このような贈答歌で「人」といえば、具体的には相手である人をさすが、それを直接に「君」と言わないで「人」と三人称に臈化し一般化して言うのは、贈答歌の一つの技巧である。「人」は、私以外の人の意であり、間接的に「あなた」をさす。というより、受手が自分のことと解するのである。だから、現代語訳する時に「あなた」と訳してしまうと(右には解りやすくそう訳したが)、その屈折が消えてしまう。俗言に言えば「誰かさんの心に」と言うに近いニュアンスであろう。前引の「君が心に秋や来ぬらん」と比較して理解すべき表現である。

題しらず

87 よそにても花見ることねをぞなくわが身にうとき春のつらさに

たとえ遠く離れてはいても花は見えますが、その花を見ることが声を
を出して泣いています。私には縁のない春が恨めしいので。

詞書、雲州本は「陽成院の御門におほつぶねがまいらでこもりぬける時に、我はこひしやとのたまひける時にきこえける」とする。

歌意は『抄』に「人にふるされし人の歌なるべし。春を思ふ人になぞらへて、今余所に隔たりても花は見るに、見るごとにねをなくと也」とあるごとく、男に去られた女の歌と一応は解することができるが、また『新抄』が「又思ふに(中略)春の司召にもれて、毎春になげく心にて

我身にうとき春といへるにてもあらむか」とする一解も捨て難いものがある。雲州本の詞書では当然に『抄』の解釈となるが、他本は題しらずであるから、この詞書に拘わる必要はないであろう。

この歌、『伊勢集』I一〇「諸共にありし昔を思ひ出でて花みるごととにねこそなかるれ」の措辞と類似する。春が我身に廻り来ないという発想は本集一四に同じ。また『新古今集』雑下一八「西宮前右大臣(高明)」「光まつ枝にかかれる露の命消えてねとや春のつれなき」「拾遺愚草」二九四六「あはれ知れ春のそなたをさす光我身につらき二月の空」なども、寓意はそれぞれ異なるが、同様の歌である。

貫之

88 風をだにまちてぞ花のちりなまし心づからにうつるふがうさ

(たとえ散るにしても) せめて風が吹くのを待って花は散ってほしいものだ。花が自分からすすんで散るのがいやなこと。

第四句、堀河本・二荒山本・片仮名本は「おのが心と」とする。『貫之集』にはなし。

諸注指摘するごとく『古今集』春下八五好風「春風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつるふとみん」に拠る。普通は好風のごとく、花を散らす風を恨むのだが、この歌は逆に花が自分の意志として散るのを見るのがいやなので、せめて風に散らされたのだということで我が心を慰めるべく、風の吹くのを待って散ってほしいと願う。そのような常識の逆を詠んだところが興の存する所である。

「――が――さ」は詠嘆表現。『万葉集』以来多い。『古今集』恋三六五六小町「夢にさへ人目をよくと見るがわびしき」など。

『続千載集』春下一四二「読人不知「手折りてもなほうつるはば桜花心づからのうさや忘れむ」は影響歌。

あれたる所にすみ侍ける女、つれ／＼におもほえ侍ければ、庭にあるすみれの花をつみて、いひつかはしける
よみ人しらず

89 わがやどにすみれの花のおほかればきやどる人やあるとまつかかな

荒れた所に住んでいました女が、退屈に感じましたので、庭にあつたすみれの花を摘んで、それに添えて言い送ったうた
私の家にはすみれの花が多いので、それを摘みに来てそのまま一夜宿る人がいるだろうかと思つて待つてゐることです。

二荒山本等の異文は後述。『古今六帖』第六すみれ、歌同じ。

「すみれ」は『倭名抄』に「葦菜 本草云葦菜俗謂之葦葵、和名須美礼」とあり、『箋注』は「蘇敬注」の「葉似戟、花紫色」を引き、すみれの葉の丸いものは俗に「駒爪」と言うといい、又「説文、葦草也、根如薺、葉細柳、蒸食之甘」とも引く。『本朝食鑑』は「計牟介」即ちゲンゲ・レンゲのことだと言う。

この歌、諸注言う如く『万葉集』巻八一四「赤人「春の野にすみれ摘みにと来し我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける」(古今六帖六すみれ作者不記)に拠る。「すみれ」には『新抄』が「男の通ひすむ意をもふくめたるなるべし」と言うとおりの「住み」を響かせている。こののち、「すみれを摘む」ということは、男の側からはその家に宿ることを意味し、女がすみれを遣すことは、男の来訪を待つ意となる。『和泉式部集』七〇三「草のいと青やかなるを、遠くいにし人を思ふ 浅茅原みるにつ

けてぞおもひやるいかなる里にすみれつむらむ」は、どのような女の家に通つてゐるだろうの意。『狭衣物語』巻一「まして葦摘みには野をなつかしみ旅寝し給ふあたりもあるべし」なども同じ。『新古今集』雑中一六八二「西院辺に早うあひ知れりける人を尋ね侍りけるに、葦つみ侍りける女の、知らぬ由申しければ、よみ侍りける 能因法師 石上ふりにし人をたづねれば荒れたる宿にすみれ摘みけり」は、荒れた宿に住んで葦をつみつつ人を待つ趣き。

「荒れたる所」といえば、『古今集』七七〇・九八四『後撰集』四五九などでわかるごとく、男の通つて来なくなつた女の家をいう。従つて詞書の「荒れたる所にすみ侍ける女」というのは、男に捨てられた女であり、男の訪れを待つてゐるのだと解すべき趣きの歌である。

ところが、二荒山本では「あれたりける所にすみけるに、つれ／＼なりければ、庭にありけるすみれをつみてとなりにつかはしける」と、詠者が男か女か不明であり(二荒山本は作者表記がないので前歌と同じ貫之となる、片仮名本は読人不知とする、二荒山本はミスであろう)、送り先は隣家となっている。片仮名本も少異はあるが基本は二荒山本に同じ。中院本・堀河本・承保本・雲州本等は「女」の歌で、「隣」につかわしたものとす。女の歌だとしても隣家に送つた歌となると、「来宿る人もあると待つかな」は明かに恋歌の表現だが、軽い戯れと見なさねばなるまい。実際に隣家の男の訪れを期待してゐるのではなく、歌を贈答することそれ自体が「つれづれ」を紛らす手段だと考えればよい。二荒山本の如く、男から男への歌とすれば、実際に訪れを期待してゐるかもしれない。もし仮に非定家本(中院本は定家系だが)の形が原形だとすると、定家本は歌詞や詞書の「荒れたる所」から捨てられた女の歌と判断して、「隣」を削る方向で改変したのであろう。

題しらず

90 山高み霞をわけてちる花を雪とやよその人は見るらん

山が高いので、霞を分けて散る花を、雪だと遠くの人は見えているだろうか。

桜を雪に喩えることは『古今集』六三・七五・八六などを始め、平安時代には類型化した比喩である(↓2)。

「山高み」は「霞を分けて」に掛るか、下句に掛るか微妙だが、「霞を分けて」に掛ると見ておく。「山高み木末を分けて流れくる滝にたぐへて落つるもみちか」(古今六帖三滝)「咲きてはや空にぞ見ゆる山高み霞を分くる花の木末は」(新千載集春上為世)と同じ文脈。

「よその人は見るらん」も『万葉集』巻七 一二三四「潮はやみ磯みにをればかづきする海人とや見らむ旅ゆく我を」を始め、本集四〇四「錦きて家に帰ると人や見るらん」など、実際と違って遠目にはこうこう見えるだろうとの発想。

『壬二集』九〇五「行くままに立野の野辺の霞かな分くとやよその人は見るらん」

91 吹風のさそふ物とはしりながらちりぬる花のしひてこひしき

桜の花は吹いてくる風が誘い散らしたものであるとは知っているけれど、散ってしまった花がむやみと恋しい。

上句、花が風に散るのを、風を男に見立て、花を女に見立てて、風が花を誘い出して連れ去ったと、男女のさまに詠じ、下句は、花を惜む心

を女への未練のさまに詠じた。「さそふ」は『古今集』雑下小町の「誘ふ水あらば」のイメージ。本集五六参照。「——とは知りながら」の言い回し、『古今集』には無く、『後撰集』に四例(五五一・六一六・一一三五)存する。

『新撰万葉集』二六九「待てと言ふに留まらぬものと知りながらしひて恋しき春の別れか」

『馬内侍集』三四「降ればかつ消えぬる雪と知りながらに山里のしひて恋しき」『千五百番歌合』二六七家長「吹く風の誘ひもはてぬ青柳の枝にぞ春の色は残れる」『津守国基集』二〇「吹く風の誘ふに花は散るとみきたが語らふに春はいぬるぞ」

きよはらのふかやぶ

92 うちをはてはるはさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらん

いつまでも春はあれほどのどやかなのに、花の心はどうして急ぐのだろうか。

『深養父集』八、『古来風体抄』に採られる。

「うちをはて」は一応は口語訳のように解したが、具体的にはどういうことであろうか。この語は時間的経続もしくは空間的拡がりを意味する。『抄』は「おしなべてなどいふ心也。なべて春はさほど長閑き物を云々」といい、『新抄』も「打延にて、春は物毎にのびくとゆるやかにのどけきものを」という。両注は空間的拡がりの意で解している。三代集では九例あるが、時間的経続の意がほとんどである。時間的なことでは『大和物語』三段に源清蔭の「青柳のいとうちはへてのどかなる春日しもこそ思ひ出でけれ」は、影響があるかもしれない。『温故抄』に

も引かれる『新勅撰集』冬四〇三二条院讃岐の「うちはへて冬はさばかり長き夜になほ残りける有明の月」は深養父に拠るであろう。

「さばかり」は何をさして「さ」というのだろうか。『古今集』春下の友則「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん」に拠って、この歌をさしているのだろうか。

つねにせうそこつかはしける女ともだちのもとより、

さくらの花のおもしろかりけるをくりて、これそこの

花に見くらべよとありければ　こわかきみ

93　わがやどの敷はゝるもしらなくに何にか花をくらべても見む

ちゝのみこの心ざせるやうにもあらで、つねに物思

ける人にてなんありける

常に消息(文)を送っていた女友達のもとから、桜の花のきれいなのを折って、「これをそこの花と見くらべなさい」と言っていましたので

小若君

私の家のなげき、木は春が来たのでも知りませんのに(ですから、花はもとより咲いていません)、一体何とこの花を比べてみればよいのでしょうか。この花と比べられるようなものはありません。

父親王が望んだようではなくて、いつも物思いをしていた人であったということだ。

詞書、「つかはしける」は此方から彼方へ送る意である(51に既述)。

そうすると、作者であるこわか君が常に女ともだちの許へ手紙を送っていたことになり、左注の「常に物思ひける人」という性格と打合わない感がある。あるいは、詞書の視点が詠者でなく女ともだちの方にあり、

女ともだちが小若君につかはすの意で書いているのかもしれない。堀河本・片仮名本は「かよはす」であり、この本文だと手紙の交換ということでは穏やかである。ただし、だからその方が原形だということまでは意味しない。

作者こわか君は、勅物に惟喬親王女とある。『本朝皇胤紹運録』には親王の娘として古今作者でもある三国町が見える。三国町は仁明天皇の更衣として貞登を生んでおり、この貞朝臣登は貞観九年(八六七)に従五位下を叙せられている。惟喬親王は承和十一年(八四四)の生れであるから、親王が三国町の父であることはない。『紹運録』は誤りである。従って系図には「こわか君」の手がかりは全くない。その呼称からすれば長女ではあるまい。左注に「父の親王の心ざせるやうにもあらで」とは具体的には何をさすのだろうか。常識的には入内のようなことをいうであろうが、しかし、親王は例の皇太子争いに敗れて小野に隠退したのだから、その娘を後宮にとは考えられない。単にしかるべき相手と結婚させるべく並々の社交性を望んだということであろうか。それにしていはいわくありげな左注である。やはり、勢力挽回策として娘を後宮にというように当時の人はこれを読み取ったのではなからうか。

歌は、嘆きを掛詞によって嘆きという木にとりなして、季節の移ろいにさえ心が向かず、我身に花やかなることのないのを「春も知らず」と言った。この「嘆木」の修辭法は『古今集』以来多く、本集でも一四・五五・六五に既出した。ただし、それらは、嘆きの多いことを、春になると嘆きの木が春を知って繁ると表現するが、これは春の来たことさえも知らないとする点が異なる。似た状況の歌としては『新抄』が指摘する『伊勢集』二三「隣なりける人の、そこに見くらべよとて花おこせたるに　春にだに忘れにける宿なれば色くらぶべき花だにもなし」など

があり、一つの類型をなしている。

『赤染衛門集』二二「おなじ春、花見にありきて 我宿のなげきは春も知らねばいでてぞ花の盛りとも見る」は本歌取り。

春の池のほとりにて

よみ人しらず

94 はるの日の影そふ池のかぐみには柳のまゆぞまづは見えける

春の池のほとりで

春の日の光が照り添って姿を写す池の水鏡には、柳の眉がまっさきに見えるのだなあ。

この歌、二荒山本になし。

詞書、「春の池」は「秋の山」などと同じ語法ではあるが、おちつきが悪い。『新抄』が「春」とあるの文字は誤って後に入たるなるべし。これは、春、池のほとりにて、とあるべきなり。かゝるふりの詞書は、春とよみきりて、池の云々とつづく例なればなり」とするの理あるが「春池の」とする伝本に中院本がある、底本のままでも必しも不都合ということでもない。片仮名本は「春日ノイケノホトリニテ」とする。地名と解しているであろう。

歌は、春の光に柳が芽ぶくのが池水に映るのを、池水を鏡に、柳を眉に喩えて、春光を擬人化して人の鏡に向うがごとくにとりなした。

水を鏡に喩えることは、白氏に「寒流帯月澄如鏡」(朗詠集 歳暮)「柳

似舞腰池似鏡」(新撰朗詠集 故宮)があり、『芸文類聚』鏡の条には朱超道

の詠鏡詩「折花須自挿、不用暫臨池」などもある。本朝では『懷風藻』の宇合の在常陸贈倭判官留在京詩序に「深等水壺、明逾水鏡」とあり、

同じ宇合の暮春曲宴南池序にも「則有沈鏡小池」(鏡を沈めたような小

池)の句がある。漢詩に源を持つ比喩であるが『古今集』春上四四伊勢「年を経て花の鏡となる水はちりかかるをや曇るといふらむ」を始め、『海人手古良集』九一には「池水鏡に似たり」の題があり、『後拾遺集』四五六『千載集』四四『新古今集』一八六二などにもその趣きの歌がある。

「柳の眉」も「長恨歌」の「芙蓉如面柳如眉」や「王昭君」の「村柳翠於眉」などがあり、和歌では『万葉集』四一九二「青柳の細き眉ねをゑみまがり」など早くから用いられた比喩である。この九四の歌は、池の鏡と柳の眉とを取り合せたところが手柄である。

自然の現象としては、春が来て陽の光がふりそそぐと、池の岸辺の柳がまっさきに芽ぶいてきて、その柳が池の水に映っているのである。それを和歌に表現する時に、ごく周知の「柳の眉」から「池の鏡」という比喩を連想し「鏡」の縁語として光の意の「影」を導き、「かげ」の持つ「姿」の意によって、水面に照りそそぐ春光を擬人化して、「春の日」がその姿(かげ)を近付ける(そふ)と——春光が照ると——池という鏡に「春の日」の「柳の眉」が映る——柳が芽をふく——とあやを織ったのである。この歌の修辞を分析すればそういうことになる。

はるのくれにかれこれ花おしみける所にて

95 かくながらちらで世をやはつくしてぬ花のときはもありと見るべく

春の終り方に、あれこれの者が花を惜んでいた所で

このようにさいたまま散らないで花は一生を終らないものかなあ。

常盤の葉があるように「花のときは」もあるのだと見ることができ
るように。

この歌も二荒山本になし。

「やはーぬ」はこの場合、願望表現の語法。散らないで世を尽さないか、そうしてほしいと、呼びかけている語法という。佐伯梅友『やはーぬ』の歌について(『国語教室 昭14・2』尾崎知光『やはーぬ』の特殊用法)(『文字語学23号 昭37』参照。

「花のときは」は「花」と「ときは」の取り合せの矛盾の面白さが興であるが、本集三八五(貫之)には「紅葉ながらに常盤ならなむ」という類想の歌がある。前後は不明だが影響関係はあるであろう。

『拾遺集』雜賀 一一六一「九條右大臣五十賀の屏風に竹ある所に花の木ちかくあり 元輔 花の色もときはならなむなよ竹の長きよにおく露しかからば」『相模集』二一『玉葉集』賀一〇五五出羽弁にも「花のときは」を詠む。

工 藤 重 矩

延喜御時、殿上のをのこどものなかにめしあげられて

をの／＼かざしさし侍けるついでに 凡河内躬恒

96 かざせども老もかくれぬこの春ぞ花のおもてはふせつべらなる

延喜の帝(醍醐天皇)の御時、殿上人たちの中に召されて、めいめい挿頭をさしましたついでに

花を挿頭にさしても老さえ隠れることのない今年の春は、花の面目を失わせてしまったようです。

『躬恒集』一二四五「延喜御時、殿上人のなかにめしあげられてかざしにし侍しに」の詞書で収まる。

殿上人が宴を催し、そこに躬恒が召し上げられて歌を詠んだのだが、このように、殿上人の宴に専門的歌人を召すことはしばしば行なわれて

いる(拙稿「藏人所の文学的活動について」『国語と国文学 昭47・6』)。そのような時、気のきいた歌を詠むのが躬恒らの役割だが、同時にその機会を利用して我身の不遇を愁えることもまた常のことである。『貫之集』八四九の「花を折りてこれかれかざすついでに かざせども花さくとやは頼まる身のなりいづべき時しなれば」も、同様の状況での同様の愁えである。

上句、花の挿頭で老を隠すこと、『古今集』春上三六東三条左大臣源常「鶯の笠にぬふてふ梅の花折てかざさむ老かくるやと」に拠る。それで「この春ぞ」と強調した。源常のかざした時には老は隠れたのであるうに、躬恒のかざす「この春」は、というのであろう。また春の司召に漏れなどして「この春」というのもあろうか。同じ躬恒の「桜花折てかざさむ黒髪の変はれる色に見もまがふべく」(家集一三 これもまた内に奉れる)も同じ発想。官位の不遇を寓しているのは疑いない。

「面を伏す」は面目を失う(他動詞としては、面目を失わせる)の意だが、この語『万葉集』『古今集』『竹取物語』『伊勢物語』にはないので、躬恒のこの例は初期の用例である。『宇津保物語』には「面を伏す」「面をおこす」の両方がある。『枕草子』二八四段(三月ばかり)に「さかしらに柳の眉のひろがりて春の面を伏する宿かな」の歌がある。

和歌の例は少いが、『源氏物語』など散文にはしばしば見えている。『名義抄』に「面目 オモテオコス」とある。「面起こし」の例は『蜻蛉日記』『仲文集』二六にもある。

「べらなり」は推量「べし」と断定「なり」の中間的用法。であるようだの意。断定でいふべき所を臆化して推量的に表現する。(拙稿「べらなりの和歌」『文献探求6号 昭55・6』)

老を愁えるのは、それだけで官位の不遇を言うことが多い。申文では

それが常套句となっており、それ故、和歌でも愁訴に老を言うのである。申文の例、「年少亦不可歎、忍飢寒而可期後栄、當于年老家貧歎深愁切」(源順)「勞積五十四年之日、已為鶴髮之衰翁」(小野道風)などなお多い。

詞書、「めしあげられ」は二荒山本では「めしあづけられ」とある。「めしあづけられ」は「召預」の意であろう。「伊勢物語」二九段に「昔、東宮の女御の御方の花の賀にめしあづけられたりけるに」とあり(めしあげの異文もある)、『類聚符宣抄』にも「可始講日本紀、件等人召預講席者」とある。『後撰集』のこの詞書としてどちらが原形かは判断できないが、儀式用語としては「めしあづく」の方が正式の言い方ということであろう。

題しらず

よみ人も

97 ひとゝせにかさなる春のあらばこそふたゝび花を見むとたのまめ

一年のうちに重ねてくる春があるならば、再び花を見ようとあてにするのですが。(春は一度しかなく、一年のうちに再び花を見えないので、花の散るのが惜しいのだ。)

この歌は本集一〇九元方の「一年に再び咲かぬ花なればむべ散ることを人は言ひけり」と全く同じ意を、仮定法で裏から表現した。前後は不明だが、影響関係を考えてよい。

「ひととせ」「ふたたび」の対語は『古今集』春下一三一興風「声たえず鳴けや鶯ひととせにふたたびとだに來べき春かは」の他、同集二七八・『千里集』二二・『後拾遺集』一一〇兼盛などやが多い。『菅家文草』「七月七日代牛女惜曉更」にも「年不再秋夜五更」の句がある。

「かさなる春」は二度の春ということだが、春に閏月がある場合にはそのように言うこともある。『千載集』一三三・範玄・『新後撰集』二六七景房・同一二六八道玄など。

「あらばこそ——め」は逆接の用法。反実仮想的用法。『古今集』恋四七四〇閑院「逢坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君が行き來をなくなくも見め」など、歌の構文として一つの類型である。

98 春くればさくてふことをぬれぎぬにきする許の花にぞありける
花のもとにて、かれこれ、ほどもなくちることなど申
けるついでに つらゆき

花の下であれこれの人々が、咲いているまもないほど早く散るなあなどと申しました、そのついでに

「春が来ると花が咲く」ということは濡衣として着せたい程の、咲いたと思うとすぐに散ってしまう花だったのですねえ。

『古今六帖』六花、作者貫之。歌同じ。家集になし。

「濡衣に着する許」は、実は春が来ても花は咲かないというのが実態であって、春が来れば花が咲くということは、桜に着せられた濡衣ではないかと思う程度(にあっけなく散る)の意。「濡衣」は『古今集』に二例、本集に六例ある。語源はいろいろに説話化されてもいるが、不明。「けり」は例の氣付きの用法。

はる花見にいでたりけるに、ふみをつかはしたりける、
その返事もなかりければ、あくるあした、きのふの返
事とこひにまうできたりければ、いひつかはしたりけ

る

よみ人しらず

99 春霞たちながら見し花ゆへにふみとめてけるあとのくやしき

春、花を見に外出したところ、(ある男が)文を送ってきたが、その返事もしなかったので、翌朝、(男から)昨日の返事を、と請いに参りましたので、言い送ったうた

ほんの通りすがりに見た花のせいで、こうしてあなたのもとに文を残すことになってしまったことが、後々まで悔やまれることです。

立ちどまって花を見たりしなければよかったと後悔しています。

工 藤 重 矩

詞書の自他が甚だまぎらわしい。右の口語訳は女である「よみ人」を中心にして訳した。「いでたりける」の主体は読人。「ふみをつかはしたりける」の主体はある人であるべきだが、「つかはす」は此方から彼方へ遣る意であるから(↓51)、このままだと「よみ人」から「ある人」へ送ったことになる。また「返事もなかりければ」は文を送った側の視点に立っての表現である。「よみ人」からの表現だと、「返事もせざりければ」とでもあるべきであろう。もしこの二つの矛盾を解消しようとするなら、一案は「文をつかはしたりける」の主体も「よみ人」とすればよい。そう考えて読み進むと、「昨日の返事と請ひにまうで、来たりければ」の主体も手紙を出した「よみ人」としなければならず、最後の「いひつかはしたりける」の主体が「よみ人」ではなくなってしまう、この読解は誤りであったことになる。第二案は、「返事もなかりければ」までを全て「ある人」が主体だと考えることである。「花見に出で」たのも、「文をつかはし」たのも「ある人」だとすると、その人からみて「返事もなかりければ」となって、ここまではよい。しかし、「返事を請ひにまうで来たりければ」で視点が逆になってしまい、不可である。結局、

この詞書には表現者の統一された視点(立場)が無いのである。従って、最後の「いひつかはしたりける」の主体が「よみ人」であることは動かないから、そこから考えると、返事を請ひに来たのは自然と相手の使であり、「ふみをつかはしたりける」の主体は相手のこととなる。「花見に出でたりける」は相手であってもかまわないが、その時には「よみ人」が外出したことが表現されていないことになって、詞書としては不十分であるから、花見に出た主体は「よみ人」とするのがよい。この見方によって口語訳すれば、先のようなになるのである。右に従って原文を改めれば、宣長の『つかね緒』の「春、花見に出でたりけるを見つけて、ある男の、文おこせたりけるを、かへりごともしせざりければ、あくる朝、昨日のかへり事と、こひにおこせたりければ、いひつかはしける」(一は他本による、は宣長の付加、は自他の改変)ということになる。もとよりこのような改変には問題があるが、いかに読み解くかという観点からは参考となる。

諸本においても、それぞれの工夫があるのであって、たとえば、中院本・承保本は視点を全く相手の側に置いて、「はる花見にいでたりけるを見て、ふみやりたりける、返事もなかりければ、あくるあしたに、きのふの返事とこひにつかはしたりければ」としている。詞書の書き方としては逆だが、『後撰集』にはこのような例はしばしばあるので、一つの成り立ちうる形である。二荒山本・片仮名本は「はるはなみにいでたりけるをみて、ふみをつかはしたりける、かへりごともしせざりければ、あくるあしたに、きのふのかへりごととこひにつかはしたりけるに、いひてはべりける」と、最後に至って読人の立場に立つ。これら案ずるに、おそらく原資料は男の側から書かれていたのであろう。それを女の「春霞」の歌のみを採用し、詞書を書くさいに、男の側の視点が残って

しまったのであろう。『後撰集』のこの詞書の原形がもし堀河本・承保本の形であれば、底本は視点を読人に置こうとして混乱を生じたのであろう。またもし底本の形が原形であれば、承保本等は視点を統一すべく改めたのであろう。二荒山本・片仮名本も可能性は右に同じである。

さて、物見に出ている女車に歌を送ることは、『古今集』恋一 四七六 業平の右近の馬場のひをりの日の歌、同四七八 忠岑の春日の祭の折の歌、同四七九 貫之の花摘みの折の歌など。本集の場合も、女が花を見に出て、花のある家の前で止ったのであろう。家の男はさっそく女車に歌を詠みかけたが、女は無視して行き過ぎた。男はしゃくだから女車のあとを追わせ女の家をたしかめ、翌朝、昨日の返事をと強引に要求する。女はその強引さにやむなく返事をしたという状況である。

「春霞」は当季の景を利用した枕詞。「たちながら」は、ねんごろに見たわけではないとの意を含む。恋の趣きを持つ語である。『新撰和歌』四八「山の端に織れる錦をたちながら見てゆきすぎんことぞくやしき」『躬恒集』二二七「春霞たちながら夜は明かしては雁とともにぞなきて帰りし」など。

「ふみとめてけるあと」は「踏み止む」と「文留む」との掛詞。「あと」は足跡と筆跡の意を兼ねる。更には時間的な「後」をも掛ける。『古今集』雑下九九六「忘れむ時のべとぞ浜千鳥行方もしらぬあとをとどむる」も、文字が鳥の足跡から発明されたという故事をふまえて、千鳥が足跡を留めるの意に、筆跡を残すの意を掛ける。後掲の伊勢の歌も同じ。従って、下句は、足を踏みとどめたことが後悔されるの意と、今この返事を贈ることによって自分の文を相手の許に留め置くことになるのが後悔されるの意を掛けている。

一首の意は口語訳のごとくであるが、いやいやながら返事をするのだ

との歌である。そういう相手だから、昨日は歌が詠めなくて返歌しなかったのではないとの意図を見せるべく、修辭にこった歌を返したのであろう。柿本氏「解釈断章」(一)は「一寸花見に出かけて留守にしたために返事が差し上げられなかったので、花見に行かねばよかったと後悔しています。失礼しましたの意」と解しているが、詠歌の状況、歌意ともいかがであらう。

『伊勢集』一二五一に次のような宇多上皇との贈答がある。

みかど、物におはしましけるついでに、かつらなるいへにおはしまして、その花にかきつけさせ給ひける

梅の花かたにのこらずなりにけりにほひてだにやをしまざりつる

かへし

春霞たちながらみし花なればふみとどめけるあとぞうれしき

『後撰集』の歌と伊勢のこの歌とでは詠歌状況も異なり、歌詞もそれぞれの詞書にふさわしく異っている。同じ歌の異伝とは考えられない。どちらかが一方を利用したのであろう。伊勢が宇多帝への返歌に他人の詠をほとんどそのまま利用するとも考えにくいので、『後撰集』の方が伊勢に拠ったのであろう。

おとこのもとよりたのめをこせて侍ければ

100 はるひさす藤のうらはのうらとけて君しおもはゞ我もたのまむ

男のもとからあてにさせるようなことを言ってきたのであなたが私のことを疑うことなく心から愛するのだしたら、私もあなたを頼りにしましょう。

「春日さす藤のうら葉の」は「うらとけて」の序。「春日さす」につい

て契沖（標注）は『万葉集』巻十四 三五〇四「波流ハルベ敵左久布治能宇良葉フデノウラハ乃宇良夜須ノウラヤスルさぬる夜ぞなき児らをしもへば」を挙げて「春日さくにてやあらん」と言い、『新抄』もこれに同じている。本文異同は、堀河本・二荒山本・片仮名本が「はるひさく」である。「春日さく」の例は『新勅撰集』賀四六八知家「春日さく藤の下蔭色見えてありしにまさる宿の池水」とあり、「春日さす」の例は『千載集』春一一「春日さすきしなさ波色深く見えのみわたるあさばらけかな」とある。この「きし」は久曾神昇氏（久曾神昇博士還暦記念研究資料集一一八頁）の注によれば、三手文庫本では「フデ」と傍注が有るよしだが、たしかに「ふ↓支」の誤りから「きし」となったものであろう。であれば、平安時代には両様の言い方が存したのである。『後撰集』としてどちらが原形かは俄には判断しがたいが、「春日さす」が「うちひさす」「あかねさす」の語構成と同じ意識で用いられた枕詞と考えれば「春日さす」でよい。従って、序詞部分のイメージは、春の日がさしそいで藤の末葉がやわらかく延びほころぶその様を、心が隔てなくうちとけるさまに仮り用いているのであろう。

「うらとく」の用例は他に見出せない。「うちとく」の例は多く、この歌も堀河本は「うちとけて」とあるが、序は「うらはのうらとけて」だから、やはり「うら」が正しい本文である。意は、心解く、気を許すの意。本集恋一五七四「泣きたむる袂こほれるけさみれば心とけても君を思はず」など、「心とけて思ふ」は、相手にすっかり心を許して安心して愛することである。「うらとく」が「心とく」と同意だとすれば、「頼め遣せて」きた男への女からの要求として「うらとけて君し思はば」は少し不審である。男が何か女に不安を抱いていて（他の男がいるのではとの疑いなど）、そのことを女も知っていて、それで、「うらとけて思は

ば」（私を疑わないなら）「我も頼まむ」と言っているのではないだろうか。□先だけで嬉しがらせるのではなく、心底私を信じて愛してほしいとの意、もしくは、嬉しがらせても、心底からは私を信じていないのだから、私も頼りにはしていませんとの意であろう。

下句の「君——我——」の言いまわし、『拾遺集』恋三七九五人丸「長月の有明の月のありつつも君し来まさば我恋ひめやも」『千載集』恋五九〇九馬内侍「君忘れずは我も忘れじ」など。

『源氏物語』藤裏葉の「藤のうら葉のとうちずんじ給へる」云々とあるのはこの歌を詠じたとされる（河海抄他）。『袋草紙』上巻の連歌骨法の項に、俊重がある女房と談じていたとき、俊重の手にしている藤を見て女が「それがうらばの」と言ったが、俊重はその意を悟りえなかった、後に父俊頼にそのことを語ったところ、父は『後撰』の「藤のうら葉のうらとけて」という歌を知らないのかと問うたので、知っておりますと答えたところ、藤を手にとっているのを見て「それがうら葉の」と言えば件の歌ではないかと言ひ、こんなことは教えようがないと嘆いたという話を伝える。